

社会運動と主体

フレーミング理論と言説分析の対話を通して

広島市立大学・直野章子

1. 目的

1990年代以降、社会運動論においても文化やイデオロギーといった概念を用いた理論や分析が台頭してきた。しかし、社会学分野における社会運動論が、「新しい社会運動論」の一潮流である E.ラクラウ=C.ムフのポストマルクス主義理論と対話することはない。フレーミング理論を構築主義の系譜に位置づける論考においても、言説はフレーミング活動のより広い解釈枠組みや資源として言及されるに留まっており、フーコーが展開した言説理論は等閑視されている (Snow 2004)。ポストマルクス主義のイデオロギー論やフーコーの言説理論とフレーミング理論との間では、権力と主体概念の決定的な相違があり、また前者は抽象度の高い理論として展開される傾向にあることから、後者が展開するような実証研究で用いるのは難しいという面もある。本報告では、フレーミング理論とポストマルクス主義的言説理論の対話の可能性について考察する。

2. 方法

社会学の分野でも、フーコーの言説分析や統治論を社会運動論に援用する試みが始まってはいない。ただし、解釈を行う際の社会的文脈として言説を論じる傾向にあり、抑圧や制限としてではなく主体を導く力として権力を捉える権力論からの考察も十分に展開されていない。他方、フーコーの言説理論をヘゲモニー論と接合させながら政治変革の論理的可能性を追究してきたラクラウの言説理論に関しては、そこで展開された諸概念を援用しながら、具体的な社会運動や社会変革の事例を分析する研究も——主に政治学の分野においてではあるが——蓄積されつつある (Howarth et.al. 2000)。これらの先行研究を踏まえて、具体的事例として日本の原爆被害者運動を取り上げる。

3. 結果・結論

フレーミング理論においては、個人であれ集合体であれ、社会運動の参加者の象徴行為という、ミクロもしくはメゾ・レベルの分析を主眼としてきたが、ローカルな場面の分析において、主体間の相互行為として象徴行為を観念するフレーミング理論は有用である。しかし、主体を象徴行為の源泉として捉えていたのでは、行為者の意図を越えた、もしくはそれに反する運動の意味や展開を的確に分析することはできない。他方で、ラクラウの言説理論は、言説が準備する主体位置を占めることで個人がアイデンティティを獲得するメカニズムを分析することはできても、なぜ、その位置を占めた個人が集合行為の主体となりえるのかを説明することはできない。原爆被害者運動の生成・発展過程を分析するにあたっては、被害者や支援者の相互行為に着目する必要があるが、同時に、反原爆という普遍的な訴えが、国民主義的言説を再生産しながら特定の主体位置を占める人びとを排除する、という意図せざる結果を生み出してきたのは何故なのかを理解するためには、言説理論を応用した分析が欠かせないのである。

Howarth, D., A.J. Aletta, and Y. Stavrakakis, 2000, *Discourse Theory and Political Analysis: Identities, Hegemonies, and Social Change*, Manchester: Manchester University Press.

Snow, D.A., 2004, "Framing Process, Ideology, and Discursive Fields," David A. Snow, et.al. eds., *The Blackwell Companion to Social Movements*, Oxford: Blackwell, 380-412.